



Title	人称と言語オルガノン・モデル
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	言語文化研究. 2017, 43, p. 97-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人称と言語オルガノン・モデル

瀧 田 恵 巳

Person und Organonmodell der Sprache

TAKITA Emi

Zusammenfassung: Wie der Titel zeigt, hat diese Abhandlung zwei Schwerpunkte: die Person der Deixis und das Organonmodell der Sprache von Bühler (1934/1982). Unter „Person“ versteht man das übliche Paradigma der „drei Personen“, die erste Person als Sprecher, die zweite Person als Hörer und die dritte Person als der andere. Das Paradigma entspricht nicht immer der aktuellen Sprachsituation: Pronomen und Nennwörter, die der dritten Person zugehören, weisen manchmal auf den Sprecher und den Hörer hin. Die Ursache liegt in dem Unterschied zwischen dem Paradigma und den Dargestellten. Das Organonmodell vereint „Sprachzeichen“, „Sender“, „Empfänger“, „Gegenstände und Sachverhalte“ in sich. Nach diesem Modell entspricht die erste Person dem „Sender“, die zweite Person dem „Empfänger“, die dritte Person „Gegenständen und Sachverhalten“. Die Sprachzeichen, auch *ich, du* für die erste und zweite Person, stellen jedoch „Gegenstände und Sachverhalte“ dar.

キーワード：人称, 言語オルガノン・モデル, Origo

1. 問題提起と対象の限定

もう二十年以上前, 九州大学で田窪行則先生の授業を受講したことがある。とても楽しい授業で時を忘れるほどであったが, その中に大変興味深い指示詞の例があった。それは仲睦まじいご夫婦の夕食の支度についての会話で, およそ次のようなものであった。

(1) 奥様：ほんとに夕食のお支度, お願いしていい?

ご主人：うん, それ (1) ならできそうだから, やっとくよ。

奥様：じゃあ, 準備をしておくから, それ (2), お願いね。

そしてご主人が帰宅すると, 夕食の材料のみが準備されていて, レシピがなかったために「夕

食のお支度」ができなかったという素晴らしい落ちまでついていた。

二つの「それ」は「夕食のお支度」という点では一致している。問題は、ご主人の「それ」は「レシピ付きでの夕食のお支度」を指していたのに対し、奥様にとっては「レシピなしの夕食のお支度」が当たり前だったという点にある。

このソ系列の用法は様々な問題を提示する。「それ」は、まず「夕食のお支度」という文脈上の先行詞を指す点で文脈指示（照応）と解釈することができる。だが、「それ（1）」が指す「夕食のお支度」は相手からの申し出、「それ（2）」が指す「夕食のお支度」は相手への依頼として、それぞれ相手の領域に属する事柄とも見なされる。つまり二つの「それ」の指示場は文脈とも想像上の相手の領域とも見なされ、指示モード¹の境界は極めて不明瞭である。さらに「レシピ」の有無という情報は、それぞれの話し手の慣習に帰せられる。

二つの「それ」には、人称という点においても不可思議な点がある。佐久間（1983: 34-36）によると、「これ」は話し手自身の勢力範囲に属し、「それ」は相手の勢力範囲のものを指す。たしかに二つの「それ」を聞き手の領域に属すると解釈しても何も矛盾は無いように思われる。だが人称は、一人称、二人称、三人称を、それぞれ話し手、聞き手、それ以外に対応させることで、本来極めて明確に区別される。しかし佐久間（1983）の説明では、三人称であるはずの「これ」と「それ」が、一人称たる話し手と二人称たる聞き手に密接に関連付けられ、同次元に置かれる。実際にコ系列の「こちら」が話し手を、ソ系列の「そちら」が聞き手を指すこともある。このように人称は本来極めて明瞭に区別されるにも関わらず、この指示詞の説明及び用法に見られる人称の境界は極めて不明瞭である。このように（1）の二つの「それ」には、指示モードの曖昧さに加えて、人称区分の問題が関わっている。

人称の問題は、日本語の「自称詞（＝話し手が自分自身に言及することばの総称）」と「対称詞（＝話の相手に言及することばの総称）」（鈴木 1973: 146）にも反映されている。鈴木（1973: 151ff.）によると、親族同士の対話においては、（2）のように目上の相手を親族名称で呼ぶことができ、（3）のように目下の人を相手にするとき、話し手は自分を相手の立場から見た親族名称で呼ぶことができる。また（4）と（5）のように職階を表す名称を自称詞及び他称詞とする例もある。しかし本来親族や職階の名称は三人称に相当するはずである。なぜ話し手や聞き手を指し示すことができるのだろうか。

- （2） 聞き手を親族名称で呼ぶ例：子供が祖父に対して

「おじいさんのひげは長いね。」（鈴木 1973: 151）

- （3） 話し手自身を親族名称で呼ぶ例：父親が子供に対して

「おとうさんのいうことをききなさい。」（鈴木 1973: 131）

1 「指示モード」という用語は、Diewald (1991: 110f.) による術語 Zeigmodus の日本語訳で、指示場の違いに基づく下位分類（現場ダイクシス、想定上のダイクシス、テキスト照応、テキストダイクシス）を統括する上位概念である。

- (4) 聞き手を職階で呼ぶ例：部下が課長に対して
「課長は間違っています。」(田窪 1997: 16)
- (5) 話し手自身を職階で呼ぶ例：課長が部下に対して
 - (5a) 「*田中君, 課長 (=話し手) にそれをください。」(田窪 1997: 30)
 - (5b) 「課長の命令には従えよ。」(田窪 1997: 39)
 - (5c) 「こころやさしい課長がやってあげようか。」(田窪 1997: 39)

さらに田窪 (1997: 30) は, (3) のように話し手は自分を目上の親族名称で指すことはできるが, (5a) の「課長」のように職階を表す名称で話し手が自分を指すのは難しいと指摘する。田窪 (1997: 31f.) はその説明として, 「相手の視点をとって表現するということは一種保護者的な関係があって初めて可能」であり, 「親方, 師匠といった関係的な名詞の場合でも, 大人の関係である限り, 自称詞」として用いることはできないとする。一方 (5b), (5c) のように「課長」が自称詞として成立する事例については, 推論による間接的指示であるとする。この説明では, (3) と (5b), (5c) の間には共通点が無いことになるが, 同様に三人称に属する名称を自称詞とするこれらの例には保護者的関係を含む共通特性があると考えられる。

鈴木 (1973) 及び田窪 (1997) の主眼は, 親族や職階を表す名称が話し手及び聞き手を指すのに用いられるメカニズムを説明することにある。しかし, そもそもなぜ三人称表現が話し手と聞き手を指しうるのかという問題とそのような事例の共通特性については, いまだ議論の余地がある。

本論文では後者の観点から, 指示モードと人称のメカニズムを, Bühler (1934/1982) が提唱する言語オルガノン・モデルを用いて解明することを目的とする。2 では, バンヴェニスト (1983) を取り上げ, 本論文で扱う人称の問題点を明らかにする。3 では, その問題を解明する手段として, Bühler (1934/1982) の言語オルガノン・モデルを導入する。4 では, このモデルに人称区分と人称表現内容を位置づけることにより, 人称の二重構造を提示する。5 では, この二重構造を可能にする要因に関する学説として, 時枝 (1941/2007) の「主体の客体化」(5.1), 指示場の「非現場性」とピアジェ (1972) の「脱中心化」(5.2) を紹介し, さらに指示場の中心である Origo「原点」の二重性 (5.3) を提示する。6 では本論文の用例を具体的に分析し, 7 ではまとめとして (1) を再び検証し, 今後の課題を提示する。

2. 人称区分に関する先行研究：バンヴェニスト (1983)

人称を明確に区別する最も有効な手段は, 一人称と二人称をコミュニケーションの担い手として話し手と聞き手に割り当て, 三人称を排除する方法である。ここでは典型的な研究として, バンヴェニスト (1983) を取り上げ, 人称上の不一致の詳細を明らかにする。

バンヴェニスト (1983: 206f.) による人称の区別は、アラビア語の文法家が用いている定義で始まる。彼らにとっては、一人称は al-mutakallimu 「話す者」、二人称は al-muḥāṭabu 「話しかけられる者」、三人称は al-yā'ibu 「(その場に) いない者」である。この名称通り、一人称と二人称は、話 discours と同時に存在し (同書 p.206)、話の進行につれ、互いに入れ替わりうる (同書 p.209) のに対し、三人称は話の外にあるため一人称と二人称に見られる役割の互換性は無く、従って「非一人称」として人称から除外される (同書 p.209)。

このように話 discours を基準とする人称区分は明瞭である。しかしフランス語の〈on〉「人は…」には、二人称、一人称と同一視される用法がある。

- (6) *On ne peut se promener sans que quelqu'un vous aborde.*

散歩すれば必ずだれかに話しかけられる。 (バンヴェニスト 1983: 211)

- (7) *Nous, on va.* 私たちが, (人が) 行く。 (同書 p.214)

(6) では、二人称を表す〈vous〉「あなた」が〈on〉「人は…」の承前詞として機能する。バンヴェニスト (1983: 211) は、多くの言語で《あなた》が〈on〉「人は…」を代用することを引き合いに出し、二人称が話しかけ以外の場合に《非人称》の一つ、即ち《わたし》以外の《非＝わたし人称》となり「人が心にえがく人称はすべて、ことにそれが話しかけられた人の場合には (中略) 《あなた》の形をとる」と説明する。(7) は北フランス語の例で、〈on〉「人は…」が一人称複数の nous 「私たち」の意味で用いられる。バンヴェニスト (1983: 215) は、これは「《わたしたち》に限定されない内容を与えようとする欲求と、用心深く一般化された《わたし》の故意にぼかされた断定の入り混じった表現である」とする。

このように、バンヴェニスト (1983) は人称を話によって非常に明確に区別するが、実際の言語表現はこの人称の境界をいともたやすく凌駕する。そして、言語表現に見られる人称の食い違いを説明するには、どうしても話による明快な人称区分を損なわざるを得ない。従って人称上の矛盾は、話による人称区分を前提に成立する。以下、人称区分 (8) と共に、本論文の例文に見られる人称上の不一致 (9) を、パターン別に提示する。

- (8) 前提：話 discours による人称区分

- ① 話の内外による対立：話における役割の互換性の有無により判別可能
話の内〔話し手 (一人称)・聞き手 (二人称)〕 対 話の外〔それ以外 (三人称)〕
- ② 話の内における対立
話すもの〔話し手 (一人称)〕 対 話しかけられるもの〔聞き手 (二人称)〕

(9) 言葉が表す人稱と指し示す人稱との対応関係と本論文の例文番号

- ① 三人称を表す言葉が一人称を指す例：(3), (5), (7), 解釈により (12c)
- ② 三人称を表す言葉が二人称を指す例：(2), (4), 解釈により (12c)
- ③ 二人称を表す言葉が三人称を指す：(6)

(9) の人稱表現と内容の間の人稱上の不一致は、日本語に非常に多くみられる。それは、鈴木 (1973: 135ff.) が「ヨーロッパ諸語の一人称、二人称代名詞が数千年の歴史を持っていることに比べると、日本語の人称代名詞に生命の短さは余りにも対照的である」(同書 p.140) と指摘するように、「話し手」を指す一人称代名詞と「聞き手」を指す二人称代名詞の定着度の相違に起因すると思われる。だが人稱表現における人稱上の不一致はヨーロッパ諸語においても見られる。(7) や後述の (12c) では話し手と聞き手が一人称代名詞及び二人称代名詞以外で表現され、(6) は一般的な人々が二人称代名詞によって表現されている。

本論文では、まず三人称表現が話し手と聞き手を指し示しうる要因を解明したのち、こうした人稱表現に見られる人稱上の不一致を検討する。

3. 言語オルガノン・モデルの概要

人稱表現に見られる人稱上の不一致の要因を解明するには、話 (discours) における話し手、聞き手、それ以外と言語表現との関係を分析する必要がある。3では、これらすべてを構成要素とする Bühler (1934/1982) の言語オルガノン・モデルについて解説する。

言語オルガノン・モデルは、元々人稱の分析のためのものではなく、記号としての言語の機能を、いわば言語外から、具体的な発話現象における三つの基盤との相互関係として多面的に図式化したもので、あらゆる言語に当てはまるものが前提となっている。Bühler (1934/1982: 12ff.) によると、言語オルガノン・モデルの成立には次のような背景がある。最初の象形文字の分析者は、それが言語の文字であり、テキストであると仮定することによってはじめて分析することができた。つまり多様な言語学的観察はすべて、言語の特性を前提にして初めて可能となる。このような言語学的分析を高度に規制する研究理念を体系的に示す必要性から4つの公理が提示される。その最初の公理 A が言語オルガノン・モデルであり、その構想はプラトンの『クラテュロス』に由来する。『クラテュロス』は名前の正しさを議論する対話篇であり、名前 (ことば) は機織り機のような道具に見立てられる。この発想から言語を「ある者が—もうひとりの者に—事物について」伝達する道具 (オルガノン)とする言語オルガノン・モデルが構築される。

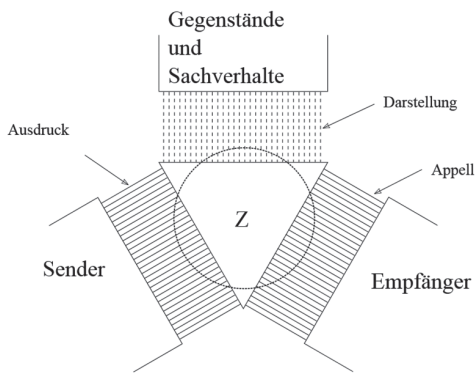


図1 言語オルガノン・モデル
(Bühler 1934/1982: 28)

ただし、上の図は以下のホームページから引用した。
<https://de.wikipedia.org/wiki/Organon-Modell>

図中の術語

Z (=Zeichen) : 言語記号

三基盤 : Sender: 送り手

Empfänger: 受け手

Gegenstände und Sachverhalte: 対象と事態

三機能 : Ausdruck: 表出

Apell: 呼びかけ

Darstellung: 叙述

このモデルでは、話し手に相当する「ある者」は「送り手 Sender」、聞き手に相当する「もう一人の者」は「受け手 Empfänger」、そして言語記号が表す具体的な内容に相当する「事物」は「対象と事態 Gegenstände und Sachverhalte」と呼ばれる。これらは三基盤として、言語記号 (Z=Zeichen) を中心に、その周囲に位置づけられる。言語記号を囲む点線円は具体的な音響現象を、三角形は現象を記号化する三つの役割を図示したものである。三角形が点線円より狭いのは、音響が記号において抽象化された音素として認識されることにより、音素を構成する弁別特徴以外の部分が捨象されることを表す。三角形が点線円よりも広いのは、感覚的な音響が記号として常に統覚的な補足を受けることを示している。三角形の三辺は三つの基盤に対応する言語記号の三つの局面を、両者の間を走る直線群はその機能を表す。言語記号の三局面に関する三基盤と三機能による規定は次の通りである。

三基盤		三機能		三局面
送り手	の内的なものの	表出 Ausdruck	機能を果たす	兆候 Symptom
受け手	への	呼びかけ Apell	機能を果たす	信号 Signal
対象と事態	の	叙述 Darstellung	機能を果たす	象徴 Symbol

このモデルの三基盤と三機能はアンバランスである。三基盤の「送り手」と「受け手」が単一要素であるのに対し、「対象と事態」には二つの要素が含まれる。また三機能の「表出」と「呼びかけ」は実線で表示されるのに対し、「叙述」は点線表示である。Bühler (1934/1982: 30) によると、「対象と事態」は、事物 (Dinge) である対象 (Gegenstände) だけでなく、事物間の相関関係たる出来事 (Sachverhalt) も含まれるが故に二重表示となり、その「叙述」には、秩序だった語彙的な帰属関係の他、統語－慣習 (Syntax-Konvention) も加わる。「叙述」の点線表示に関する明確な説明は無いが、Bühler (1934/1982: 30) は実際の言語記号の音形と事物との間

には類似性がなく、過去の類似性も定かではないことを指摘しており、言語記号と「対象と事態」との間接的な関係が示唆されている。

しかし(8)の人称区分に基づくならば、「叙述」が間接的である要因として、さらに次の点を指摘することができる。「送り手」による「表出」と「受け手」への「呼びかけ」は話 discours に属する行為であり、「送り手」と「受け手」は話の役割に相当する。一方「対象と事態」は、話とは別次元の「叙述」対象である。さらに「対象と事態」は言語記号によって叙述される世界、即ち「言語化される世界」である。それに対して「送り手」の「表出」と「受け手」への「呼びかけ」は、既に「言語化された世界」をやりとりする、いわば「言語外の世界」である。Bühler (1934/1982) にはその記述は無いが、言語オルガノン・モデルにおいて「叙述」は話の内外の境界に位置するが故に、その点線表示は、話の内外を隔てる境界、そして同時に言語化される世界と言語外の世界との境界を示すと考えられる。

Bühler (1934/1982: 30f.) は、言語記号が「対象と事態」のみによって捉えられるわけではなく、特に指示詞は「表出」と「呼びかけ」が際立つ事例の一つと見なす。もちろん指示詞も言語記号である以上、「対象と事態」を叙述対象とするが、実際に用いる際にはその叙述内容がしばしば言語外の世界に投影され、「表出」する「送り手」を中心に指示対象を位置づけ、「受け手」へ「呼びかけ」することが重要な役割を果たす。

4. 言語オルガノン・モデルにおける人稱の位置づけと二重構造

(8) の話の内外による人稱区分(話し手＝一人称、聞き手＝二人称、それ以外＝三人称)は、言語オルガノン・モデルにおいて、ちょうど言語記号を囲む三基盤に当てはまる。

(10) 言語オルガノン・モデルにおける話の内外による人稱区分の位置づけ

送り手 (Sender) = 一人称

受け手 (Empfänger) = 二人称

対象と事態 (Gegenstände und Sachverhalte) = 三人称

言語オルガノン・モデルに(10)のように人稱を配置する先行研究として、林(1979: 71)とTanaka(2011: 35)が挙げられる。(8)と(10)に示される人稱区分は明快である。しかし言語オルガノン・モデルの提唱者であるBühler(1934/1982)は、この人稱区分をモデルに反映させることはしていない。私見によると、原因は言語表現内容が占める位置にある。人稱表現が全て言語記号であることは紛れもない事実である。そして言語記号であれば、「叙述」される表現内容は全て「対象と事態」に位置づけられる。つまり(11)に示すように、「送り手」を指す一人称表現も、また「受け手」を指す二人称表現も、その表現内容は「対象と事態」であり、従

って言語表現内容の人称は「対象と事態」において構築される。

(11) 言語オルガノン・モデルにおける言語表現内容の位置づけ

一人称代名詞であれ二人称代名詞であれ、言語記号の叙述内容は全て「対象と事態」であり、言語表現内容の人称は、まず「対象と事態」で構築される。

明記されてはいないものの、Bühler (1934/1982) による人称代名詞の記述は、この (11) の立場をとっている。

Bühler (1934/1982: 380f.) は、インド・ゲルマン語の人称代名詞のうち、特に三人称代名詞の特異性に焦点を当てる。三人称代名詞 *er*「彼」は、心理学的には「送り手」の記号である *ich*「私」と「受け手」の記号である *du*「君」とは別のレベルにある。次のラテン語動詞 *amāre*「愛する」の一人称変化形の (12a) と二人称変化形の (12b) では、「愛する」という事態が、そのまま実際の発話行動に割り当てられ、現実の発話行動に投影される。一方三人称変化形の (12c) において、*Caius* は、「送り手」でも「受け手」でもない場合、現場で指示しうる限りにおいて、かろうじて現実の発話状況に置かれる²。

(12) ラテン語動詞 *amāre*「愛する」の三つの人称変化形 (Bühler 1934/1982: 380)

- a) *amō te.* 「私は君を愛している」
- b) *amās me.* 「君は私を愛している」
- c) *amat Caius Camillam.* 「ガイウスはカミッラを愛している」

しかし Bühler (1934/1982: 380f.) に依拠するならば、まさに発話行動に投影しがたい「この第三人称の存在によって事態を叙述（強調は本論文著者による）している動詞文の中の *ich* と *du* が何のためにあるのかが極めて明白になる」（同書 p.380）。それは「このつけ加えられた役割の担い手を発話行動上の役割の担い手である *ich* と *du* と同じ位置にすえるためである」（同書 p.381）。例えば (12c) の文は、*Caius* 自らが *Camilla* に愛を宣言したり、手紙文に用いられると、*Caius* は自分と相手（*Camilla*）に対し、言語的にある種の対象化を行い、また部外者であるかのように「送り手」と「受け手」の記号を消去する（同書 p.382）。

Bühler (1934/1982) は、三人称表現が一人称表現と二人称表現と同じ次元にあり、「送り手」と「受け手」を指し示しうると指摘する。この内容は、(8) と (10) の人称区分とは異なるが、人称表現が人称の違いを問わず言語記号として同次元にあり「対象と事態」を叙述対象とする

2 さらに Bühler (1934/1982: 381) によると、「役割を示す記号を全面的に置くそもそもの発端は、言語が目前にあるものを越えて目の前にないものを語り再現するところにある」。この「目の前にないものを再現する」という特徴は、現場での指示が限定されるという三人称の特徴に当てはまると同時に、本論文の 5.2 で扱う非現場性にも関連する。

という (11) の言語表現に関する人稱の記述には当てはまる。

以上のことから、なぜ三人称表現がそもそも話し手や聞き手を指し示すことができるのかという問題は、(11) の解釈に基づいて、次のように説明することができる。

日本語の親族名称は、本来三人称を表す言葉でありながら、「話し手」を指す自称詞や、「聞き手」を指す対称詞の機能も果たす。それは、表現内容としての「話し手」及び「聞き手」が「対象と事態」の領域に属しているからこそ可能になる。「送り手」は自らを「対象と事態」領域において対象化し、その客体化された自己を「送り手」と見なせば一人称表現である「私」と呼ぶ。話し手が自分を相手に対する「おとうさん」(3) と見なせば、言語表現上の人稱は三人称となる。「受け手」も「対象と事態」領域において対象化され、「送り手」に対する「受け手」と見なされれば「君」などの二人称表現で呼ばれ、自分に対する「おじいさん」と見なされれば、三人称表現による (2) の発言もまた成立する。

指示詞「これ」「それ」「あれ」が三人称表現でありながら、「話し手」と「聞き手」と同次元に置かれるのは、この場合の「話し手」と「聞き手」が「送り手」と「受け手」そのものではなく、「対象と事態」において対象化された「送り手」と「受け手」だからである。

このように、言語オルガノン・モデルにおける人稱区分と言語表現内容の位置づけの解釈は、二つの人稱体系を前提としている。一つは (8) 及び (10) に示したように、話の内外を区別することによる人稱体系で、言語記号を取り巻く環境としての三基盤に対応することから「言語外の人稱」と見なされる。人稱を弁別する数字は「言語外の人稱」に由来する。もう一つの人稱体系は (11) に示したように、「対象と事態」において構築される。これは言語表現内容としての人稱体系で、いわば「言語内の人稱」である。

人稱体系の二重構造は「送り手」と「受け手」が「対象と事態」の領域で対象化されることを前提としている。この対象化はどのように実現し、何がそれを可能にするのだろうか。5 ではその要因と背景を検討し、人稱体系の二重構造の基点ともいえる Origo の二重性を提示する。

5. 人稱体系の二重構造の要因と背景

5.1 「送り手」と「受け手」の対象化を詳述する学説：「主体の客体化」

言語オルガノン・モデルにおいて、「送り手」と「受け手」が言語表現によって叙述される際、必然的に「対象と事態」の領域において対象化される。この「送り手」の対象化に関する学説として、時枝 (1941/2007) が『国語学原論』において提唱する「主体の客体化」が挙げられる。言語オルガノン・モデルとの関連は指摘されていないものの、「主体の客体化」説には随所で酷似する部分があるため、その部分も含めてここで紹介しておきたい。

まずこの学説には、次のような背景がある。

時枝 (1941/2007) は、その導入部において、言語研究の真の学問的方法は、対象に対する考

察から生まれるべきものであって、対象以前に方法や理論が定立されるべきではないとし（同書 p.20）、公理を提唱する Bühler (1934/1982) とは異なる立場をとる。

しかしその後、徐々に Bühler (1934/1982) に似た立場に移行する。言語に対する主体的立場と観察の立場を述べる段になると、言語をもっぱら研究対象として観察、分析、記述する観察的立場（時枝 1941/2007: 39）よりも、言語を思想の手段と考え、実際に表現行為としての思想の分節や発音行為や文字記載をなし、聴手の側からいえば、言語をもっぱら話手の思想を理解する媒体としてこれを受け入れ、文字を読み、音声を聞き、意味を理解するという主体的立場（同書 p.38）を優先する。この時点ですでに、言語そのものを観察する立場より、主体的な認識に基づく理論や研究方法に移行している。

さらに「具体的な言語経験を中心にして、確実な対象把握への道を明らかに」（同書 p.55）するとしつつも、「言語を以て音声と概念との結合であるとする考方には既に対象それ自身に対する抽象が行われて」（同書 pp.55-56）おり、この「抽象された言語の分析をなす前に、具体的な言語経験が如何なる条件の下に存在するかを観察し、そこから言語の本質的領域を決定して行くという手続を忘れてはならない」（同書 p.56）と提言する。ここにおいて、時枝（1941/2007）の方法論は、完全に抽象化された言語を前提とした方法論をとっている。その結果、言語の存在条件を「言語は誰（主体）かが、誰（場面）かに、何物（素材）について語ることによって成立する」（同書 p.57）とする。この言語の存在条件は、『クラテュロス』に基づく言語オルガノン・モデルの前提（本論文の3を参照のこと）に酷似している。また時枝（1941/2007）は、言語の存在条件を、「主体」、「場面」、「素材」を頂点とする三角形として図示するが、この図も言語オルガノン・モデルに非常によく似ている。

しかし時枝（1941/2007）は、「送り手」に相当する「主体」と「対象と事態」に相当する「素材」との関係をより重点的に考察する。「主体」とは「言語に於ける話手であって、言語的表現行為の行為者」（同書 p.58）であるが、それは必ずしも文法上の主語ではない。次の（13）の引用に見られるように、「私は読んだ」と発言する主体と「私」は厳密には区別される。なぜなら主体は発話時点で発言しているのであって、読んでいるわけではないからである。

（13）主体の客体化（時枝 1941/2007: 59）

文法上の第一人称が主体と考えられることがある。成る程、「私は読んだ」という表現に於いて、この表現をしたものは、「私」であるから、この第一人称は、この言語の主体を表している様に考えられる。しかしながら、猶よく考えて見るに、「私」というのは、主体そのものでなくして、主体の客体化され、素材化されたものであって、主体自らの表現ではない。客体化され、素材化されたものは、もはや主体の外に置かれたものであるから、実質的に見て、「私」は前例（「猫が鼠を食う」）の「猫」と何等択ぶ処がなく、異なる処は、「私」が主体の客体化されたものであり、「猫」は全然第三者の素材化されたものであると

いうことであって、そこから第一人称、第三人称の区別が生ずる。従って、「私」は主格とはいいい得ても、この言語の主体とはいいい得ないのである。この様に第一人称は、第二、第三人称と共に全く素材に関するものである。後に述べることであるが、第二人称も場面即ち聴手そのものではなく、聴手の素材化され、客体化されたものであるのと斉しい。この考方は極めて重要であって、かようにして、言語の主体は、絶対に表現の素材とは、同列同格には自己を言語に於いて表現しないものである。

(強調及び括弧内例文「猫が鼠を食う」の補足は本論文著者)

時枝 (1941/2007) は、「主体の客体化」という現象を取り上げることにより、「主体」がそれを客体化・素材化した文法上の第一人称ではないことを説明するだけでなく、文法上の第二人称および第三人称も客体化・素材化されたものであることを主張する。

時枝 (1941/2007) による言語の存在条件は、主体の客体化のみならず、それを通じて、他の人称の客体化についても詳述しているという点で卓越している³。存在条件の一つである「素材」は、「言語によって理解せられる表象、概念、事物」(同書 p.68) という定義され、ちょうど言語オルガノン・モデルの「対象と事態」に相当する。従って、「主体の客体化」は、本論文における「対象と事態」における「送り手」の対象化に合致し、(13) の解説における「聴手の素材化」は、「受け手」の対象化に相当する。そしてこの素材化された人称こそが、本論文でいう言語内の人称、「対象と事態」において構築される人称に相当する。

5.2 「送り手」と「受け手」の客体化を可能にする要因：「非現場性」と「脱中心化」

では何がこの「送り手」と「受け手」の客体化を可能にしているのだろうか。またこの客体化は一般的には意識されていないが、それはなぜだろうか。

客体化を可能にする要因としては、言語オルガノン・モデルの「非現場性」が挙げられる。言語記号によって叙述される「対象と事態」は、様々な世界の表象である。いわゆる「現実」についても、我々は目に映り、耳に聞こえるものを知覚するまま認識し描写するわけではない。例えばあるシャープ・ペンシルを描写してみよう。それは高校の入学祝でいただいた品で、薄桃色の地に鮮やかな赤紫色のコスモスの花とつばみが描かれている。この描写には、「送り手」の対象に関わる記憶(高校入学時の思い出)や目に映る色や模様に対する印象、用いる言語(日本語)に関する様々な思考と表象が含まれている。

3 言語オルガノン・モデルに比較すると、時枝 (1941/2007) の言語の存在条件には二つの問題がある。まず言語記号と機能が示されていない。そして第二に、聴手を含む「場面」が、三角形の図では「主体」や「素材」と対等に位置づけられる一方で、別の図では「主体」と「素材」を統合する。もし (13) の引用の通り「主体」や「聴手」が「素材化され」るのであれば、「場面」も「素材」の領域で構築されてしかるべきである。ただし時枝 (1941/2007) の「場面」に関連して、まず永野賢が「言葉の使い分けに関する基本問題」(『国語と国文学』1949年) 及び「『相手』という概念について」(『国語学』第9輯) で、客観的に存在する話し手・聞き手・素材で構成される「客観的立場における場面」とその存在が話し手(または聞き手)の意識の中に映し出される「主体的立場における場面」に分け、次に高橋 (1956/1992) が後者を言語体系に結びつけた点は、本論文に多大な示唆を与えた。

知覚認識も表象に深く関わる。宮崎・上野（1985: 3f., 12f.）によると、ある視点から知覚される物体の一定の姿は、知覚の瞬間に決定されるスナップ・ショット的な見えではなく、これらを連続的にとらえ、その変化率の中に普遍性を見出すことによって構築される表象の産物である。例えば、あるシャープ・ペンシルを細い棒状の物として知覚するでしょう。しかしこれを実際に動かすと、長方形や同心円に近い形状になり、瞬間的に見える形はそれぞれ異なる。つまり対象の視覚像の構築には、一時的な見えの連続を統合する表象が不可欠なのである。聴覚も同様である。鳥の声や音楽は、その瞬間の音響だけでなく、連続する音響の変化を統合して全体像を表象することによってはじめて把握することができる。

Jackendoff (2002: 303) もまた、「世界の中の事物」といういわゆる「現実」が疑わしいことを指摘する。シャーロック・ホームズは、話の中の登場人物であるが、イギリス人であることは真であるといえる。また地理的事物であるニューヨークとボストン間の距離は、触れることができず、測定の方法によって様々な形をとりうる。故に Jackendoff (2002: 304) は、「世界」を言語使用者の心の中に置き言語と並べる「指示の概念主義理論 Conceptualist theory of reference」の立場をとり、従来の「言語が人間の使用から独立しており、直接世界と関係を持つ」（同書 pp.295-296）とする「指示の常識的实在理論 Common sense realist theory of reference」（同書 p.304）は、その便利な省略形と見なす。

このように「対象と事態」の世界は、描写や知覚による認識を問わず表象の産物である。そして「対象と事態」に属する指示場が表象によるものであれば、現場、文脈、想定などの指示場に関する指示モードの境界も、曖昧であってしかるべきである。

「対象と事態」のみならず「送り手」もまた表象の産物である。例えば「送り手」が（18）の引用内の例（「私は読んだ」）を発言するとき、「送り手」は自分がいた世界を表象により「対象と事態」として把握し、その中の指示場の中心（Origo）に客体化した自己（「私」）を位置づける。同時に「送り手」はその世界を脱却した存在として、時の隔たりを超えて過去の自分の行為を描写する。これは明らかに表象による操作である。我々は、言語記号を媒体として表象された「対象と事態」を叙述する際、「対象と事態」の世界を凌駕する観察者となる。故に自らを客体化することができるのである。「受け手」もまた、「対象と事態」において自己を客体化するとともに、表象により「対象と事態」の観察者として参与する。

このように我々は言語という媒体を通じて、話をつかさどる「送り手」と「受け手」の次元と、叙述される対象の次元に自らを分化する。言語オルガノン・モデルは、いわば言語記号によって生じせしめられた表象モデルである。この自己分化には二つの心的操作がある。一つは自らを客体化し「対象と事態」に位置づける操作、もう一つは「対象と事態」の世界を脱却し、観察者として「送り手」と「受け手」の次元に移行する操作である。この心理的操作はピアジェ（1972: 24）の「脱中心化 *décentration* (Piaget (1970: 16))」に該当する。

ピアジェ（1972: 21）によると、乳児は知覚器官の及ぶ空間領域において自分があたかも世界

の中心であるかのように全てを自分の身体に向けるが、自分を中心とは認識していない。言い換えれば原初的活動は、主体的なものと客体的なものとの間が未分化であると同時に、基本的に中心化されている。ところが、生後18か月から24か月目の段階、つまり象徴機能と表象的知能とが始まる時期に、次の一種のコペルニクスの転回が遂行される（同書 p.23）。

(14) 脱中心化と主客分離（ピアジェ 1972: 23）

それは、活動を自分の身体から脱中心化すること、自分の身体をほかの客体の中の一つの客体として、それらすべてを含む空間内で、みなすこと、および自分を運動の起源または支配者としてさえ認識しはじめている主体の共応効果のもとに客体の諸作用を結びつけることから成っている。（強調は本論文著者）

脱中心化と主客分離が象徴機能と表象的知能が始まる時期に芽生えるのは、おそらく偶然ではない。象徴と表象によって初めて人は自らを客体化させ世界の中心に置き、かつその世界から脱却し、観察する主体となる。このとき主体は自己を活動と認識の起源として構成し、主体としての自己の認識活動を客体としての自己の運動と共に遂行する。ピアジェ（1972: 23-24）によると、脱中心化と主客分離による活動の共応は「移動」に帰着する。移動という場所の変化により主体と客体は分化し、客体が次第に実体化されたものとして認識されるとともに、主体はこの世界を学ぶものとしてのみ世界に関与する。ここに主客分離の活動が成立する。

脱中心化と主客分離は、言語オルガノン・モデルにもあてはまる。「送り手」と「受け手」はいわば言語活動の主体として、「対象と事態」において客体化された「送り手」と「受け手」の活動やその周囲の出来事を認識する。しかし脱中心化と主客分離はほとんど意識されていない、それは、この心理操作が芽生える生後18か月から24か月目があまりにも早期であるため、成長に伴い次第に自動化され、言語を自由に使いこなせる頃には、すっかり自覚されなくなるからだと考えられる。『現代心理学〔理論〕事典』（pp.417-420）は、「内化」という心理過程に関して、思考の自動化、短縮化、無自覚化を次のように説明する。

(15) 思考の自動化と無意識化（『現代心理学〔理論〕事典』 pp.417-418）

たとえば、車の運転を習い始めたばかりのときには、右に曲がるときにハンドルを2回まわすと教えられれば、“いっかい にかい” などと言語的につぶやきながら、両手で大きな円を描きながらゆっくりとまわす。しかし、何年も運転している人に“どうやって右にまわったのか”とたずねてもその行為を明確に記述することはできないだろう。さらに、たとえ同乗者と雑談していても何の問題もなく右に曲がることのできるのである。

熟達した行為において習慣化した思考過程はもはや自覚されない。言語活動における脱中心

化と主客分離もまた、あまりにも早期に芽生えた思考である。言語記号により自分を描写するとき、言語を運用する自分と描写される自分が分割されているにも関わらず、その思考は、熟練ドライバーのようにもはや意識されない。「送り手」を示す言葉と「受け手」を示す言葉が「対象と事態」において客体化された「送り手」と「受け手」を叙述するということが意識されないのは、まさに言語の熟練者であることの証なのである。

5.3 Origo の二重性

人称体系の二重構造を顕著に示すものとして、Origo の二重性が挙げられる。Origo とは指示場において主観的な位置づけを行う上での基準点で「脱中心化」とも深い関わりがある。Bühler (1934/1982: 102) は Origo の導入に際して次のように説明する。

(16) Zwei Striche auf dem Papier, die sich senkrecht schneiden, sollen uns ein Koordinatensystem andeuten, O die Origo, den Koordinatenausgangspunkt: [...]

Ich behaupte, daß drei Zeigwörter an die Stelle von O gesetzt werden müssen, wenn dies Schema das Zeigfeld der menschlichen Sprache repräsentieren soll, nämlich die Zeigwörter *hier*, *jetzt* und *ich*. [...]

An der Lautform der Wörtchen *jetzt*, *hier*, *ich*, an ihren phonematischen Gepräge, ist nichts Auffallendes; nur das ist eigenartig, daß jedes von ihnen fordert: schau auf mich Klangphänomen und nimm mich als AugenblicksMarke das eine, als Ortsmarke das andere, als Sendermarke (Sendercharakteristikum) das dritte. (Bühler 1934/1982: 102)

紙の上の垂直に交わる二直線は座標体系を、0 は原点、即ち座標の出発点を表しているものとする。(中略)

私の主張は、もしこの図式が人間の言語の指示場を表示するのであれば、三つの指示語、即ち *hier*, *jetzt*, *ich* が 0 の代わりに据えられなくてはならないということである。(中略) *jetzt*, *hier*, *ich* という音声形式の音素的特徴には、なんら特別目だつものはない。特徴的なのはただ、これらの語がそれぞれ次のような要請を行っていることである。音響現象である私に注目し、*jetzt* については私をその瞬間表示として、*hier* については私をその場の表示として、*ich* については私をその送り手（送り手の特徴）の表示としなさい。

(『言語理論 上』 pp.120-121, 一部改訳)

この説明によると、Origo という名称は、座標の Origo「原点」に由来し、指示場を座標に見立てることが前提となる。そして言語によって指示されるとき、Origo の代わりに三つの指示

語, hier「ここ」, jetzt「いま」, ich「私」が置かれる⁴。引用の末尾にあるように, これら三つの指示語は, 呼びかける相手に対して「送り手」の位置や発話の瞬間, そして現に発話している「送り手」本人を指し示すことから, Origoは「送り手」に密接に結びつくものと見なされる。

しかしこれらの指示語が実際に, 発話時や「送り手」の発話時の位置, リアルタイムの本人を表すケースはむしろ稀である。Herbermann (1988) は, 三つの指示語が発話時の話し手に密着するコンテキストではむしろ不要であることを指摘する。

- (17) 散歩に出かけようとして, 玄関扉の前で外の天気気が付いて:

Es regnet. (Herbermann 1988: 42) 雨が降っている。[hier「ここ」は不要]

- (18) Ich bin jetzt hier. (同書 p.16) 私は今ここにいます。[特殊なコンテキスト]

(17) のようにリアルタイムの「送り手」の位置で起こる出来事の叙述には, hier「ここ」はむしろ不要である。また (18) は, この文を発話するいかなる存在にも当てはまる。それにも関わらず Herbermann (1988: 16) によると, この文が受け入れられるのは, 話し手が見通しのきかない場所にいて, 聞き手に合図を送り, 今の自分の居場所を知らせる⁵ような特殊なケースで, 典型的なコンテキストを提示するのは極めて難しい。

これらの事例は, 指示語によって叙述される Origo が「送り手」には直結しないことを示している。さらに「送り手」との間接性を示す別の現象がある。それは Bühler (1934/1982: 102-103) の指摘する Origo の「移しかえ Übersetzung」と呼ばれる現象である。

(19) In unserem Falle ist es einfach hinzunehmen, das Koordinatensystem der „subjektiven Orientierung“, in welcher alle Verkehrspartner befangen sind und befangen bleiben. Jeder benimmt sich wohlorientiert in dem seinigen und versteht das Verhalten des anderen. Wenn ich Nase gegen Nase als Kommandant vor einer ausgerichteten Front von Turnern stehe, wähle ich konventionsgemäß die Kommandos, „vor, zurück, rechts, links“ adäquat nicht meinem eigenen, sondern adäquat dem fremden Orientierungssystem, und die Übersetzung ist psychologisch so einfach, daß jeder Gruppenführer sie beherrschen lernt.

(Bühler 1934/1982: 102-103)

われわれの場合, いかなる対話者も拘束され続ける「主観的定位」による座標体系をそのまま受け入れることは造作もない。誰もが自分なりに十分に定位付けを行い, 他者のふ

4 Origo の指示語に見られる「ここ」と「私」の関連にも, 日本語における「これ」と話し手との関係と同様, 三人称と一人称の同次元性が現れている。

5 (18) のような事例は稀であるという点に関しては, 寺門伸先生より貴重なご指摘をいただいた。なお, 「送り手」が「受け手」に対して自分の位置や自分自身を指し示すダイクシスは, Brugmann (1904: 10) により Ich-Deixis「私ーダイクシス」, Bühler (1934/1982: 83) により Hic-Deixis「ここーダイクシス」と呼ばれる Zeigart「指示様式」の一つである。

るまいを理解する。仮に私が整列して体操をしている人々の前に立って、彼らに向かい合って号令をかけるとき、私は習慣に従って、「前進、後退、右向け右、左向け左」という号令を、私自身ではなく、私の前に立っている相手の人々の定位の体系に合わせて行う。そしてこの移しかえは心理学的に非常に簡単であって、どのようなリーダーでも、それを習得して使いこなすことができる。(『言語理論 上』p.121, 一部改訳, 強調は本論文著者)

この引用のように、向かい合って体操をしている人々に対して号令をかける立場にある者は、しばしば相手の立場から前後左右を位置づける。このとき、主観的な定位の基準である Origo は「送り手」以外の他者に移しかえることができる。このように Origo は「送り手」以外の他者にも置かれ、いわば二重に存在することになる。

言語による Origo と「送り手」との間接性、及び「送り手」以外に移しかえられるという Origo の二重性は、Fricke (2003) の実験結果にも見られる。

Fricke (2003) は、ドイツ語母語話者の大学一年生 33 名のグループを A, B, C の 3 グループに分け、まずグループ A が各自実際に歩いた道程をグループ B に伝え、グループ B は聞いた道順をグループ C に伝える。次の例は、グループ B の Beate がグループ C のメンバーの Caroline に道順を説明する発話であるが、[] 内において Origo の二重性が現れる。「あなたから見て左側に links von dir」という発言は、言語上は「受け手」を基準としており Origo は「受け手」(Caroline) にあるが、まさにその瞬間、「送り手」(Beate) は自分の左側を指し示すしぐさをする。つまりしぐさの Origo は「送り手」(Beate) に置かれているのである。このように links von dir という発話行為には、言語上の Origo (Caroline) としぐさの Origo (Beate) が共存する。

(20) Dann soll irgendwann links ein Arka/ ein Eingang zum Arkadenzentrum kommen oder so was. Ich kenns leider nich, aber es soll dann also [links von dir] irgendwann Arkaden, zwischen den Häusern irgendwann stehen und da sollst du reingehen, nach links, ja? (Fricke 2003: 78)
 そしたら、そのうち左側にアーケ、アーケードの(ショッピング)センターの入り口らしいものが見えてくるそうよ。悪いけどよくわからない。でもそのとき[あなたから見て向かって左側に]アーケードが、建物の間にそのうち見えてくるはずだから、そしたらそこから入っていけばいいのよ、左方向よ、いい?

指示語「hier ここ – jetzt いま – ich 私」によって叙述される Origo の「送り手」への間接性と Origo の移しかえという現象は、共に次の二つの Origo が存在することを示している。一つはジェスチャーの中心となりつつも言語化されない Origo で、これは「送り手」に直結する。もう一方は言語化される Origo で、指示語によって叙述され、道案内のテキストに現れるが、「送り手」には直結しない。

Origoの二重性は、言語オルガノン・モデルからすれば当然のことである。なぜなら「送り手」は言語記号の表出者であって、言語記号の叙述内容にはなりえないからである。このモデルにおいて「送り手」に直結しうるのは言語化しないOrigoであって、言語化されるOrigoは言語記号によって叙述されるが故に「対象と事態」に属する。

しかし(18)の指示語は言語上のOrigoを叙述するにも関わらず、現に発話している「送り手」の領域を指し示す。この問題解決の鍵は、「定記述・固有名詞は直示的に聞き手、話し手を指すのではなく、呼びかけによる活性化で聞き手や話し手という役割を付与される」という田窪(1997: 38)の指摘にもあるように、「受け手」への「呼びかけ」機能にある。つまり「呼びかけ」により、叙述内容はいわば発話現場に引き寄せられるのである。例えば「ここ」という言葉を聞くと、我々はまずその内容がOrigoを中心とした領域であることを把握する。この操作は「対象と事態」において行われる。その後自分たちに「呼びかけ」られることから、この内容を発話現場に投影し、「送り手」に結びつけるのである。言語記号によって叙述される言語内のOrigoは、「対象と事態」において対象化されるため「送り手」には直結しないが、「呼びかけ」によって二次的に「送り手」を指し示す。

このようにOrigoには「送り手」に直結する「言語外のOrigo」と、「対象と事態」に属する言語記号の叙述対象である「言語内のOrigo」が存在し、それぞれを中心とする指示場を構築する。その各指示場が言語外の人称と言語内の人称に対応する。

なお(19)、(20)に見られるOrigoの移しかえには、人称に関して重要な点がある。それは、Origoが容易に対象化された「受け手」に設定されるということである。これは「送り手」と「受け手」が話においてその役割を容易に変換できることに由来する。

6. 人稱体系の二重構造に基づく分析と考察

以上のように人稱体系は、言語オルガノン・モデルにおける「送り手」—「受け手」—「対象と事態」という言語外の次元と「対象と事態」内の言語叙述内容の次元に存在する。(2)と(3)はこの仕組みに基づいて次のように分析することができる。

(2)では、「対象と事態」の領域において客体化された「受け手」が子供を中心とした親族関係(「おじいさん」)でとらえられていることから、言語内のOrigoは客体化された「送り手」(子供)に設定されていることがわかる。この親族名称が「表出」と「呼びかけ」により話のレベルに投影され、二次的に「受け手」を指し示す。

(3)では、「対象と事態」において客体化された「送り手」は「おとうさん」という親族関係で捉えられている。この名称は客体化された「受け手」である子供の立場を基準としていることから、客体化された「受け手」がOrigoであることがわかる。この名称が「表出」と「呼びかけ」により話のレベルに投影され、二次的に「送り手」を指し示す。

このように、人称を二つの次元に設定することにより、まず言語内の人称の次元（「対象と事態」）において客体化された「送り手」と「受け手」に一人称表現及び二人称表現以外の名称を容易に割り当てることができ、さらにその名称を言語外の人称へ投影する事により、二次的に「送り手」と「受け手」に結びつけることができる。

さらにこの仕組みにあてはめて分析することにより、言語内の Origo が設定される対象の共通特性が明らかになる。

(2) と (3) において言語内の Origo はいずれも子供に設定される。先述したように鈴木 (1973: 151ff.) は親族同士の対話における自称詞と他称詞は目下の者を基準とすることを指摘している。さらに鈴木 (1973: 168) は子供を Origo として家族内の親族名称が決定する現象について、「妻が子供の前で夫のことを、パパとか『おとうさん』と言及できるのは、彼女が心理的に子供の立場に同調するからである。彼女は、自分自身の立場から見れば夫でしかあり得ない人物を、子供の見地を経由して見直すのである。つまり、彼女は自分が使うパパという自己中心語の原点を、子供に移す（強調は本論文著者）」⁶と説明する。

これらの見解は、Origo が目下の者や子供に設定されるメカニズムを説明するものであるが、(4) と (5) の事例まで説明する原理とはなり得ない。別の事例にも適用可能な原理を導き出すには次の二点を明らかにする必要がある。まず第一に Origo が設定される優先順位、第二に Origo が設定される対象の共通特性である。

Origo は優先的に客体化された「送り手」に設定される。この性質は言語外の Origo が「送り手」に直結することに由来する。(2) のように Origo が客体化された「送り手」に設定されると、一般に「送り手」と見なされ一人称表現が割り当てられる。それに対して客体化された「送り手」が親族や職階を表す名称で呼ばれる場合、それを位置づける別の基準が必要である。客体化された「送り手」の次に Origo となるのは、先述の移しかえに関する (19), (20) で示したように、話において「送り手」の役割を容易に引き継ぐ、客体化された「受け手」である。(3) はこのボタンに該当する。

では、さらに事例を分析し、Origo が設定される対象の共通特性について検討しよう。

(4) では、「対象と事態」において言語化される Origo は客体化された「送り手」に設定される。客体化された「受け手」は、客体化された「送り手」を Origo として、会社内の上下関係などが重視されるコンテキストに応じて職階「課長」と見なされる。この名称が「表出」と「呼びかけ」により話のレベルに投影され、二次的に「受け手」を指し示す。

(5a) の事例において、客体化された「送り手」は別の基準を要する職階名称を割り当てられるため、言語化される Origo ではない。しかし次に Origo を設定すべき客体化された「受け手」（「田中君」）は何らかの要因により Origo とは見なされない。従って客体化された「送り手」に

6 鈴木 (1973) は「原点」を多用するが、Bühler (1934/1982) との関連は示されていない。

は、他の Origo を要する職階「課長」を割り当てることはできない。

一方 (5b) および (5c) においては、客体化された「受け手」が Origo と見なされる。故に客体化された「送り手」は、客体化された「受け手」を Origo として、会社内の上下関係などの要因に従い、職階を表す名称「課長」で叙述される。この名称が「表出」と「呼びかけ」により話のレベルに投影され、二次的に「送り手」を指し示す。

さて、本論文のわずかな例にも言語内の Origo が設定される対象にある共通特性が現れている。まず何が言語内の Origo となりえたかを考察しよう。(2) と (4) では客体化された「送り手」であり、これは Origo 設定の優先順位にかなっている。客体化された「受け手」に関しては (3) の「子供」、(5b) の「命令には従え」と強制される者、(5c) の助けるべき対象とされる者が Origo として設定される一方、(5a) のように「田中君」と呼ぶような部下は Origo とはならない。これらの Origo の共通特性は、田窪 (1997: 31f.) の「相手の視点をとって表現するということは一種保護者的な関係があつて初めて可能」という指摘に見られる「保護者的な関係」を下位分類の一つとする。それは「コントロールされうる者」である。この特性は、言語オルガノン・モデルにおける「送り手」と「対象と事態」内において客体化された「送り手」との関係に由来する。つまり「対象と事態」において客体化された「送り手」は、いわば言語外の「送り手」の分身であり、「送り手」の意のままにされる存在である。そして「子供」もまた庇護の対象としてコントロールを受ける。また (5b) の命令を強制される者、(5c) の助けられる部下も心的な印象は異なるが、いずれもコントロールを受ける対象である。さらに (11) の引用において Origo の移しかえが行われる「受け手」も「送り手」が出す号令に従うべき対象であり、また (18) の道順の説明において Origo が設定される Caroline もまた、目的地までの道順の指示を受けている。

Origo の共通特性を「コントロールされうる者」ととらえることにより、人称表現の諸現象に対して次のような有機的な関係を推定することができる。小学校の教員が小学生に対して自分を「先生」と称することは容易く、大学の教員が大学生に対してそれを行うのは難しい。それは、小学生はコントロール可能と見なされるが、大学生はそう見なされないからである。さらに日本語では小さな男の子に対して「ばくちゃんこれ欲しいんでしょ。」(鈴木 1973: 172) と一人称表現で呼びかけることができるのも、相手へのコントロールが強く働いたため、Origo に加えて「送り手」の要素までも付与された結果だと考えられる。また日本語の二人称表現は目上の人や社会的地位が上の人に対してはタブー視される。話における「送り手」と「受け手」は交替可能で、いわば同レベルにある。客体化された「受け手」もまた「受け手」と見なされれば、典型的に Origo が置かれる客体化された「送り手」と同レベルにある「コントロールされうる者」と見なされる。この心的印象は上位との対人関係において芳しいものではない。程度の差はあるが、ヨーロッパ諸言語の例についても次のような推測が成り立つ。(6) は vous という二人称により一般的な出来事を相手に差し向け、一種のコントロールを喚起する。(7) は

「私たち」を一般的な人としてとらえなおすことで、Origoを放棄し相手への配慮を示す。(12c)のガイユスが「送り手」でカミッラが「受け手」を指す場合は、Origoを放棄することで、互いの尊厳を認めている。

人称に関わる言語現象は他にもあるが、言語オルガノン・モデルによる人称の二重構造を基盤に言語内のOrigoを設定することにより、有機的な説明が可能になると考えられる。

7. まとめと今後の課題

本論文では冒頭の二つの「それ」に関する指示モードと人称の曖昧さへの問いを出発点として、人称の問題を扱い、言語オルガノン・モデルに基づいて次の点を明らかにした。

人称体系は、「送り手」、「受け手」、「対象と事態」から成る言語外の人称(10)と言語表現の叙述内容として「対象と事態」において客体化された人称(11)から成る二重構造である。

この人称体系の二重構造を可能にするのは、「送り手」と「受け手」の客体化である。それは言語内のOrigoと言語外のOrigoの二重性によっても示される。さらに「送り手」と「受け手」の客体化を可能にする要因が「非現場性」と「脱中心化」である。言語オルガノン・モデルの構成要素は言語記号を媒体に成立する表象の産物、つまり非現場的なものである。表象であるが故に、「送り手」と「受け手」は、「対象と事態」で客体化された「送り手」と「受け手」と共存しうる。「脱中心化」という心理操作はこの客体化を可能にする。

「対象と事態」において客体化された「送り手」と「受け手」は、言語内のOrigoを基準として、一人称代名詞や二人称代名詞のみならず、そのコンテキストに応じて適切な名称が割り当てられ、「表出」と「呼びかけ」により二次的に「送り手」と「受け手」を指す。故に「送り手」と「受け手」が三人称表現で呼ばれるという事態が生じる。

ここで改めて冒頭の(1)について再考したい。この会話の内容は、言語オルガノン・モデルにおいて「対象と事態」に属する。「対象と事態」を文脈テキストと見なすと、二つの「それ」は文脈の先行詞「夕食のお支度」を指す文脈指示(照応)機能を果たすと解される。もしこの会話を具体的な一場面としてとらえるなら、「対象と事態」は会話場面としての指示場となり、その中心Origoに客体化された「送り手」が配置され、その相手として、やはり客体化された「受け手」が置かれる。すると、「それ」が指す「夕食のお支度」は、「それ(1)」については相手からの申し出、「それ(2)」については相手への依頼として、それぞれ相手の領域に属する事柄とみなされる。さらに「夕食のお支度」に関わるレシピの有無は、言語記号の叙述内容には反映されない「送り手」と「受け手」が持つ情報である。こうした情報は、言語記号によって叙述される事態を超えていることから、言語オルガノン・モデルにおいては、「送り手」と「受け手」の領域に配置される。

さて本論文では、指示詞コソアのうちソ系列の用法を出発点に、人称の問題を言語オルガノ

ン・モデルに基づいて分析した。このモデルにより人称体系の二重構造と言語化される Origo の共通特性が明らかになり、指示詞の用法や人称の諸現象における有機的な関係を見いだすことが可能となる。それはこのモデルが言語表現のみではなく、言語の特徴を外から捉えた公理であり、人間の心理に深く関わることに起因する。言語オルガノン・モデルとは多様な事例や諸概念に耐えうる確固たる構造である。人称表現にはまだまだ様々な事例があり、ソ系列と共にコ系列とア系列を分析する際には、指示場の中心である Origo「原点」のみならず、どこから見ているかというときの「どこ」に相当する「視点」という概念が不可欠であるが、こうした様々なダイクシスの諸概念と諸事例を言語オルガノン・モデルに基づいて検討することを、今後の課題としたい。

謝辞

冒頭の幸福な指示詞の例を紹介して下さった田窪行則先生、常に貴重なご助言をくださる寺門伸先生、そして本論文の議論の根幹に関わる重要なお指摘を賜った二人の査読の先生方に心より感謝申し上げます。本論文は JSPS 科研費 JP253704300 の助成を受けたものです。

主要参考文献

- Brugmann, Karl (1904):** Die Demonstrativpronomen der indogermanischen Sprachen. Eine bedeutungsgeschichtliche Untersuchung. Abhandlungen der philologisch-historischen Klasse der Königl. Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften 22/6, Teubner, Leipzig.
- Bühler, Karl (1934/1982):** Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Fischer, Stuttgart, 1982 (Nachdruck von 1934). (脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論 言語の叙述機能 上巻』クロノス, 1983.)
- Diewald, Gabriele Maria (1991):** Deixis und Textsorten im Deutschen (=Reihe Germanistische Linguistik 118), Niemeyer, Tübingen.
- Fricke, Ellen (2003):** *Origo*, pointing, and conceptualization - what gestures reveal about the nature of the *origo* in face-to-face interaction, in: Lenz, F.(ed.): Deictic Conceptualisation of Space, Time, and Person, Amsterdam/Philadelphia, 69-93.
- 林四郎 (1979):**「言語行動概観」In: 南不二男編『講座言語第3巻 言語と行動』大修館書店, 67-98.
- Herbermann, Clemens-Peter (1988):** Modi Referentiae. Studien zum sprachlichen Bezug zur Wirklichkeit, Winter, Heidelberg.
- Jackendoff, Ray (2002):** Foundations of Language. Brain, Meaning, Grammar, Evolution, Oxford. (郡司隆男訳『言語の基盤 脳・意味・文法・進化』岩波書店, 2006.)

- 宮崎清孝・上野直樹 (1985) : 『視点 (= 認知科学選書第 I 期第 1 巻)』 東京大学出版会.
- 中島義明編『現代心理学 [理論] 事典』 朝倉書店, 2001.
- Piaget, Jean (1970): L'épistémologie génétique (que sais-je 1399), Press universitaires de France, Paris.
- ピアジェ, ジャン (1972) (滝沢武久訳) : 『発生的認識論』 白水社.
- プラトン (1974) (水地宗明訳) : 「クラテュロス 一名名の正しさについて」, 『クラテュロス・テアイテトス (プラトン全集 2)』, 岩波書店.
- 佐久間鼎 (1983) : 『現代日本語の表現と語法 (補正版)』 くろしお出版.
- 高橋太郎 (1956/1992) : 「『場面』と『場』」, 『国語国文』 25-9, 1956, 53 (591)-61 (599). In: 金水敏・田窪行則 (編) 『指示詞』 ひつじ書房, 1992, 38-46.
- 田窪行則 (1997) : 「日本語の人称表現」, 田窪行則 (編) 『視点と言語行動』 くろしお出版, 13-44.
- Tanaka, Shin (2011): Deixis und Anaphorik –Referenzstrategien in Text, Satz und Wort– (Linguistik-Impulse & Tendenzen 42), de Gruyter, Berlin.
- 時枝誠記 (1941/2007) : 『国語学原論 (上) [全 2 冊]』 岩波書店, 2007 (底本 : 『国語学原論』, 岩波書店, 1941).